

エコノミー概念の系譜学序説

杉 山 吉 弘

要 約

本論の課題は古典ギリシャ以来のエコノミー概念の基本的な意味と用法を明らかにすることであり、したがってまたたとえばフーコーの言う権力の「エコノミー」とは何かを問うことでもある。まず最初に、ラローシュによる語源的研究を活用して古典ギリシャのオイコノミア概念の解明を試み、エコノミー概念の基礎的な成り立ちを明らかにした。その考察に依拠して、アリストテレスのオイコノミア、神のオイコノミア、自然のエコノミー、アニマル・エコノミー、モラル・エコノミーなど、エコノミー概念の系譜学における主要なテーマについてその概要を論述した。本論で明らかになったことは、エコノミー概念は共同体の「管理運営」または「統治」を基本的な意味としつつ、ある全体の統御、統御の術または学、（被）統御系という複合的な用法をもつということである。

キーワード：エコノミー、統御、神と自然、系譜学

I. はじめに

本論を執筆するに至る動機は、さまざまな欧米の著作で出会うエコノミーという用語の基本的な意味をいかに理解すべきかという困惑に始まる。「経済」あるいは「経済学」と訳せば済むというわけにはいかない。たとえばリンネの「自然のエコノミー」におけるエコノミー概念をいかに理解すべきなのか。むしろ、エコノミー概念が経済学史研究者などの限定された視点からのみ問題にされてきたことが、その根底的な概念内容の理解を妨げてきたと言えないか。

近世経済史において重要な位置を占めるケネーの例を挙げてみよう。1774年に死去したケネーに対する弔辞のなかで、ミラボー侯爵は、ケネーは「医学の中に動物経済を、形而上学の中に道德経済を、農業の中に政治経済を発見した」と述べてその業績を回顧した。この文は、島津亮二・菱山泉訳によるオンケン版『ケネー全集』の翻訳第1巻からの引用である（原文は旧漢字）⁽¹⁾。それぞれ「動物経済」は*économie animale*、「道德経済」は*économie morale*、「政治経済」は*économie politique*の邦訳である。ここでは最初の*économie animale*についてのみ簡単に指摘しておく。本全集に収められた「エコノミー・アニマルに関する自然学的論文」で明らかのように、

それは当時の医学における研究分野であり、現在の生理学に相当する内容をもつ。ケネーはペティと同様に医者であり、ルイ15世の侍医であった。『政治算術』で著名なペティは政治体アイルランドの「政治解剖学」の著者でもあり、経済の循環・再生産過程を体系的に把握しようとしたケネーのエコノミー・ポリティックも血液循環論を含む彼のエコノミー・アニマル研究の経歴と無縁ではありえない。

それでは、「経済」と訳されたそれら三つのエコノミーには何か共通の意味があるのか。本論の目的はその共通の基本的な意味を解明することにある。エコノミー概念に関する難問は、その用語が欧米の著者によって一切の説明抜きで使用され、自明のものと想定されていることによる。その自明性はその用語の系譜学的歴史によって支えられている。本論では「序説」として、エコノミー概念の系譜学についてその大略を粗描するにとどめる。

II. 現代思想におけるエコノミー概念の例——フーコーの場合

エコノミー概念の系譜学はただ単に歴史的な問題であるのではなく、その概念は現代の思想を理解する上でも重要な問題編成であり、多くの著作のなかで多様な形で言及されている。私が最初にエコノミー概念の問題編成に出会ったのは、リオタール『リビドー経済』の翻訳の仕事においてである⁽²⁾。Economie libidinaleをかく訳したことははたして適切であったか。そのリオタールの著作の2年前に出版されたドゥルーズとガタリの『アンチ・オイディプス』において、著者たちはエコノミー・リビディナールをエコノミー・ポリティックと一体のものとしてその相関関係において捉えていた⁽³⁾。リオタールはそのエコノミー・リビディナールを、身体・記号・売春・贈与・迷宮といったあらゆる人間的活動の根底をなすと同時に隠蔽されるものとして全面展開する。リオタールのエコノミー・リビディナール概念は、欲動エネルギーの循環と配分を想定するフロイトのエコノミー Ökonomie 概念と無縁でないのは明らかであるとはいえ、フロイト的な意味に限定されるものではない（フロイトにおけるエコノミーは通常「経済論」と訳される）。ところでリオタールのその著作の最終章は「この書物のエコノミー」と題されている。では、書物の「エコノミー」とは何か。

次にフーコーをそのエコノミー概念に限定して少し詳しく取りあげてみよう。フーコーの使用するエコノミー概念をいかに理解するかは彼の哲学思想の根幹にかかわる問題である。『知の考古学』（1969年）では、いわゆる「経済」を意味する用法を除くと、「言説的布置のエコノミー」や「言説のエコノミー」といった表現が目につく。次いで『監視と処罰』（1975年）でエコノミーの用語は爆発的に増殖する。いわゆる「経済」関連以外でもっとも基本的な用法は「処罰権力のエコノミー」という表現である。

フーコーは、古典主義時代から近代にかけて、さまざまな領域で身体の詳細まで浸透する規律権力のテクノロジーが一つの新たな「エコノミー」を形成するに至る過程を追究している（こ

でのテクノロジーとは「技術論」ではなくて、身体に関するさまざまな統御技術の総称である）。換言すれば、その新たなエコノミーを形成する内在的原理がテクノロジーとしての規律権力であり、社会体corps socialにおけるその新たなエコノミーの形成とともに「監獄の誕生」が可能になる。この著作ではフーコーの権力論は、国家のレベルでも経済や法のレベルでもなく、社会体のレベルに位置づけられている。

フーコーの友人でもあるジャン・ピエール・ファイユもまた、エコノミーの用語を鍵概念として使用した一人である。ファイユはドイツのナチズム時代の「全体主義的言語」形成における「語りのエコノミー *économie narrative*」を追究し、そのエコノミー批判の思想的重要性を力説した⁽⁴⁾。フーコーは『監視と処罰』出版後の1975年のある対談で、ファイユの方法論上の考え方と自分のやり方が近いと発言している⁽⁵⁾。

「セクシュアリティの装置」の形成を論究し「生 - 権力」あるいは「生政治」の概念を導入したフーコーの次の著作『セクシュアリティの歴史』第1巻『知への意志』の翻訳では、エコノミーの用語はさまざまな文脈によって多様に訳されている（たとえば「産出・経営」、「生産・配分構造」、言説の「生産・管理構造」、身体と快楽の「産出・配分構造」など）。ところが1984年に同時に出版されたフーコーの最後の著作である『セクシュアリティの歴史』第2巻『快楽の活用』と第3巻『自己への配慮』では、権力の「エコノミー」の用語が消える⁽⁶⁾。しかし一方では、1977-1978年度のコレージュ・ド・フランス講義では「権力のエコノミー」の研究が継続して行われていた。後に邦訳されたその講義録翻訳では、いわゆる経済あるいは経済学という意味のほかに「*économie*には物事の構成・成り立ちを指す漠然とした用法があり、それは『エコノミー』としている」と訳出上の注がつけられている⁽⁷⁾。まさにこの「漠然とした用法」の解明こそが本論のテーマにはかならない。

最後に、エコノミーという用語の比喩的使用について言及しておきたい。およそいかなる言葉もその使用の歴史的過程を通じて複合的な意味をそのうちに蓄積している。その場合もっとも警戒すべきことは、過去のその同じ言葉に後の時代が獲得した意味を遡及的に付与しないことである。言葉とその意味あるいは概念とが異なることは、概念の形成史を問題にする系譜学的な視点のもっとも重要な論点の一つである。エコノミー概念の系譜学を試みるとき、「経済」の訳語を前提してその意味を念頭におくかぎり、そしてそこに生産－流通－消費の循環的構造を想定するかぎり、そうした回顧的な錯誤はまぬがれがたい。それゆえ、エコノミーという用語に出会うとすぐ「経済」と訳す通例の操作をいったん括弧に入れる必要がある。確かに、近世以降のエコノミー概念が不可避免的にそのような意味を担うようになっていることは言うまでもない。上述したファイユの「語りのエコノミー」も、全体主義的な語りの「生産」と「流通」を比喩的に想定するものであった。しかし、そうした想定に固執するなら、エコノミー概念の根底的な意味を解明する道は閉ざされてしまうであろう。

Ⅲ. 古典ギリシャ語におけるオイコノミア概念について

ルソーは1755年刊行の『百科全書』で《Economie ou Oeconomie》の項目を執筆し、2年後にそれを《Discours sur l'économie politique》の表題で単行本として出版した。その冒頭の部分を次に引用する。「エコノミー ECONOMIE または OECONOMIE (道徳的および政治的) という言葉は、家を意味するオイコス *οἶκος* と、法を意味するノモス *νόμος* から来たもので、もともとは、家族全体の共同利益のための、賢明で法にかなった一家の統治を意味するものにすぎない。その後、この用語の意味は、国家という大家族の統治にまで拡張された。この二つの意味を区別するために、後者の場合を一般経済または政治経済と呼び、前者の場合を家庭経済または私経済と呼ぶ。この論文では、前者のみが問題とされる。」⁽⁸⁾

この著作は通常は「政治経済論」と訳されるが、白水社刊『ルソー全集』第5巻での訳者坂上孝氏がその「解説」で指摘しているように、それは今日のいわゆる経済学ではなく、*économie politique* とは国家の統治にほかならず、その点では、『百科全書』の《Oeconomie politique》の項目を執筆したブーランジェや『哲学辞典』のヴォルテールも同様なのである⁽⁹⁾。私としては本論の課題に照らして、この冒頭の文章から次の三つの論点を指摘しておきたい。第一に、エコノミーに「道徳的および政治的」という形容詞がついていることである。エコノミー・ポリティックはまた同時にエコノミー・モラルでもある。第二に、*économie* はなぜ統治 *gouvernement* の意味をもつのか。元来それは統治という意味をもつものなのか。第三に、*économie* が家 *oikos* と法 *nomos* とから由来するという説明は適切なものか。その語源説はルソーと同時代の他の著者にも見られるものであり、また『オクスフォード英語辞典』にも記載されており、我が国の文献でもしばしばそのような説明がなされてきた。以下に述べるように、第二の問いに対しては肯定で答えることができるが、第三の問いにおけるその語源説は、*nomos* の語源自体がはなはだ不明なこともあり、いささか疑問である。むしろ、そうした語源説はエコノミー概念の基本的な意味の理解を妨げてきたのではないか。

その基本的な意味の解明を試みるに当たって、私がここで依拠する文献は、ストラスブール大学文学部教授であったE. ラローシュが1949年に出版したフランス語文献『古代ギリシャ語における語根Nem-の歴史』である⁽¹⁰⁾。その文献はドゥルーズが「ノマド」の語源的な説明のために『差異と反復』第1章で参照したものでもある⁽¹¹⁾。私の知るかぎり、ラローシュのその著作はその年代的方法と豊かな内容からしてもっとも信頼するに値するものである。以下、古典ギリシャ語とフランス語を交えながら解説していきたい。

その第6章は*nomos* について論じているが、そこでは*oikonomia* に関する言及はない。ラローシュによれば、ノモスのもっとも基本的な意味は「秩序」である⁽¹²⁾。オイコノミアが集中的に論じられるのは第5章「*nomos* としての合成語」においてである。*nemô* は語根 *nem-* からできた動詞であるが、その動詞からさらに多くの合成語が派生した。結論を先に言えば、《*oikon*

nemô》つまり「(私は) 家を管理運営する」から合成語oikonomosつまり「家の管理運営者」が派生し、その名詞から動詞の「家を管理運営するoikonomô」と、その抽象名詞化「家を管理運営することoikonomia」が生じた。それは、たとえば市場（アゴラ）の治安を監督することから「市場監督官agoranomos」が形成され、その用語から動詞agoranomôとその抽象名詞agoronomiaが生じるのと同様である。

以上のラローシュの説明によれば、《-nomos》あるいは《-nomia》は動詞nemô（不定法nemein）に由来するのであって、同じnemeinを語源とする「法nomos」に直接由来するものではない。すなわちoikonomiaは家oikosと法nomosに由来するのではない。それでは動詞nemeinの基本的な意味は何なのか。「ホメロスの時代」からその能動相の基本的な意味は二つある。一つは、家の主人が招待客に食べ物を配るときのような、「配分するdistribuer」という意味である。もう一つは「放牧する、草を食べさせる」という牧人的・遊牧的な意味である（ドゥルーズが関心をもったノマドは後者の意味から派生する）。両者の意味は後に微妙に浸透しあうことになるが、後者についてはここでは触れない。ラローシュによれば、「配分する」はそれ以前の行為としての「分割するpartager」とはっきり区別されねばならない。またラローシュは、ゼウスが人間たちにそれぞれの運命を割り当てる（配分する）といった神話的な用法に注意を促すと同時に、その後のnemeinの意味の変容過程においても「配分する」という基本的な意味がたえず存続していることを力説している。

次の「ヘシオドスからヘロドトスへの時代」に移ると、nemein能動相の意味は増幅しその使用も拡大する。人間たちに運命を割り当てるゼウスの神話的な意味が増幅して、ゼウスは一切の運命を導くものとみなされ、nemeinは「支配する」という意味をもつようになる。さらにその神話的な用法に、政治的・法的な概念の展開が結びつく。立法者は神々と人間たちの父であるゼウスに比較しうる者である。そこからnemeinは、物質的財の「配分distribution」や市民の権利の「割り当てrépartition」、さらには「管理運営administration」や「統治gouvernement」の意味をもつことになる。ラローシュによれば、「アッティカ方言の時代」に移ると、nemeinは多くのその使用領域を失い、その意味の豊かさを失うが、他方ではそれに由来する合成語や派生語がそれに取って替わる。

もう一度オイコノミアの用語に立ちもどろう。oikonomosは、nemeinが通常「管理運営する」や「統治する」ことを意味していた時代の紀元前6世紀に現れる。〈家の〉という限定はクセノポンやプラトン、アリストテレスの時代でも同じであるが、oikonomosから派生したoikonomiaは、政治的な統治の技術との類推から、家を治める「技術technê」あるいは「学epistêmê」を意味することにもなり、更に「家の」という限定が外れて一般的に、ある目的を達成するために「管理運営する」、「配置・整序するdisposer」を意味するに至る。要するに動詞オイコノメインが古い動詞ネメインに取って替わる⁽¹³⁾。たとえばヒポクラテスは「患者に関する調整oikonomia」について語る。

ラローシュはオイコノミアとその関連語の使用の拡がりを、次の4項目にまとめている。第一は「生理学と医学」の分野である。生命体はポリスと同様に管理運営される必要がある。ラローシュは、「自然はまた良きオイコノモスである」というアリストテレスの言葉を引用している。周知のように、アリストテレスにとって自然phusisのもっとも根本的な意味は自然的存在の内在的原理（始動因）であるから、自然は生命体の秩序の「良きオイコノモス」なのである。

第二が「文学」の分野である。レトリックにおける「弁論における秩序」や「諸部分の配置」はオイコノミアである。あるいは悲劇の諸部分の適正な配置はオイコノミアである。後にキケロがレトリックのオイコノミアについて論じたことはよく知られている。少し脱線するが、ヴォルテールの『哲学辞典』のなかに「エコノミー」の項目と並んで「パロルのエコノミー」という項目がある。それは「エコノミーによって語ること」とされ、実際には教会の神父たちが「時と場所に従って」語り方を変えることを風刺したものである。つまりそれは、神父たちによる、その発言paroleのそうした管理運営économieの技のことである⁽¹⁴⁾。

第三は「政治」の分野であり、オイコノミアは政治的・法的な意味で使われ、フランス語のadministration, gouvernementの意味になる。第四は「哲学と宗教」の分野である。「偶然を排除するものの全体、一定の規則、自然の法則に従って働くものの全体は、あるオイコノミアに従っている。世界全体はある賢明なオイコノモスの手中にある。……ある全体の調和は、回りくどい表現で『宇宙全体のオイコノミア tôn holôn oikonomia』と言い表わされる。」⁽¹⁵⁾

宗教の分野についてはキリスト教におけるオイコノミア概念との関連で後ほど改めて論じる。今ここで問題にしたいのは、ラローシュからの引用文の最後に言及されている「宇宙全体のオイコノミア」という表現である（ここで「宇宙全体」と訳したのはホロン〔全体〕である）。それはストア派のクリュシッポスの言葉である。私がその一見して不可解な表現にはじめて出会ったのは、フランスの哲学史家エミール・ブレイエの『クリュシッポスと古ストア哲学』においてであった⁽¹⁶⁾。京都大学学術出版局から西洋古典叢書の一冊として刊行されているクリュシッポスの邦訳では「宇宙全体の統御」と訳されている⁽¹⁷⁾。ここで確認すべきことは次の二点である。第一に、オイコノミア（統御）にはその内在的な原理が存在するということである。ここではその原理はアルケーとしてのジュシス（自然）である。次いで、宇宙全体はわれわれ人間の「家」でもあり、それは国家や都市のように統治されている（特にキケロ『神々の本性について』、参照）。したがって、オイコノミアの概念が自然界に適用されるのを理解することは容易である。世界靈魂によって統御されるマクロコスモスのなかの、生命・靈魂によって統御されるミクロコスモスである人間は、そのマクロコスモスの「市民」なのである。

IV. エコノミー概念の系譜学

ストア哲学を含めたオイコノミア概念の展開に関する上述の考察に基づいて、ここでオイコノ

ミア概念のおおよその基本的な意味と用法について、私なりの概略的なまとめをしておきたい。管理運営や統治よりも中立的と思われる言葉で、オイコノミアを仮に「統御」と訳しておく。第一に、oikonomia / économie（ギリシャ語の接尾辞-iaはフランス語では-ieとなる）とは、ある目的を実現するために内在的な原理（アルケー）によって統御すること、統御の働き、統御作用を意味する。それはある全体の諸部分の配分 distribution あるいは割り当て répartition による管理運営であり、統治である（リデル-スコットのギリシャ語辞典では経営 management）。次いで、オイコノミアは統御する術（または学）を意味する。最後に、その受動的な意味においてオイコノミアは、ある目的を実現するために「統御されたもの」、その秩序 ordre、その配置 disposition を意味する。それを（被）統御系と言おう。したがってそれらをまとめると、オイコノミアの用語は統御、統御の術（または学）、（被）統御系という複合的な意味内容をもつ。クリュシッポスの言う「宇宙全体のオイコノミア」におけるオイコノミアは、文脈からして内在的な原理である自然による統御作用を意味する。

オイコノミアの概念がさまざまな領域（共同体 koinônia としての家・ポリス・国家、宇宙全体、自然、生体、人間身体など）を横断して活用されるとき、人間の共同体の管理運営・統治という基本的な意味と上述した複合的な用法がその根底にあることは言うまでもない。そうしたエコノミー理解を念頭に置きながら、以下、エコノミー概念の系譜学のなかでもっとも主要なテーマと思われるものを順次取りあげる。その歴史を通覧するに当たって参照すべき有益な著作を三冊挙げると、ゲルハルト・リヒター『オイコノミア』、ジョルジョ・アガンベン『王国と栄光』、そしてベルナール・バラン『秩序と時間』である⁽¹⁸⁾。リヒターの研究関心は神学に向けられている。アガンベンの著作の副題は「オイコノミアと統治の神学的系譜学のために」であり、エコノミー概念についての豊富な情報を含む。ただしその著作は、オイコノミアの語源研究に関するラローシュの仕事を知らない。バランはフランスの著名な哲学者ジョルジュ・カンギレムの教え子であり、その著作は前二者とは異なり生命科学史に関するものであって、エコノミー・アニマルについての系譜学的考察を含む。

1. アリストテレスにおけるオイコノミア概念

アリストテレスの著作は、クセノポンの小品集と並んで当時のオイコノミアを知る上で重要な資料である。アリストテレスの用いるオイコノミアの主要な意味は「家政」である。家を治めること（統御すること）、あるいは家を治める術であり、英語に訳すれば household である。フランス語では冗語法的に économie domestique となる。家（オイコス）の共同体（コイノーニア）はポリス共同体の基本的な構成単位であり、ポリス共同体の目的論的な理念に従属している。ポリスの最高善は市民の幸福であるが、家の長はポリスに参加してその活動に貢献しなければならない。ポリスの形成と衰退——諸部族の編成、土地所有、法律の歴史的展開、奴隷制の進展および自由市民と非市民との対立、戦役、鉱業・海運・製造業の拡がり、商業的交易と貨幣経済の浸

透と制限など——に関する資料は、現在なお増殖しつつある。ここではオイコノミアの理解にとって基本的と思われる点をいくつか指摘するにとどめる。

アリストテレスにとってオイコノミアとは土地所有に基づくオイコス内部の三つの関係、すなわち子に対する父、妻に対する夫、奴隷や在留異国人に対する主人despotèsの関係を治めることであり、なによりも家族内の人間関係の統御であった⁽¹⁹⁾。したがって、アリストテレスにおけるオイコノミアは家政であって「家計」ではない。家計はオイコノミアの活動の一部でしかなく副次的なものにすぎない。いわゆる経済の語源がオイコノミアであることから、オイコノミアを家計と解することは回路的な錯誤でしかない。夫－父－主人である家の長は、家の諸活動の全体を統御する「原理」であると同時に、自由市民としてポリスの事業に参加する余暇をもたねばならない。主人（デスポテース）に代わって家を治める者が、代理人としての「オイコノモス」である。それはフランス語でéconome、英語でministerと訳されるが、そのministerの管理的実践行為がadministrationである。父－主であるかその代理人であるかは別にして、オイコノモスはオイコノミアを実践する主体にはかならない。エコノミー概念にとって父－主の原理とオイコノモスとの関係構造は重要な意味をもつ。

共同体としての家とポリスとは自然に適合した自給自足性autarkeiaに基づいて治められる。カール・ポランニーは、1957年に発表した論文「アリストテレスによる経済の発見」において、アリストテレスが「経済の境界時代」、すなわち「市場制度が交易の軌道のなかに進入しはじめた時点」に生きていたことを力説した⁽²⁰⁾。ポランニーはポリス共同体のいまだ互酬的な性格を明らかにして、たとえば「価格」の問題についても、市場の需要・供給のメカニズムを前提にしてアリストテレスを論じることの愚を指摘した。実際、アリストテレスはポリスの曲がり角となる紀元前5世紀後半以降の時代に生きている。ヴェルナンによれば、いまだ製造業や商業の活動はポリスの周縁に留まり、その担い手も非市民、在留異国人であったし、「アリストテレスの時代には、経済的生活のもっとも広範な部門は……市場経済の外部に留まっている。」⁽²¹⁾ 余剰が生まれたときは、それはポリスの公共的な事業のために抛出されるのである。

もちろん交換は行われるが、貨幣への無限な欲求による金もうけのための交易は「自然に反した」ものとして排斥され、共同体の自給自足性を維持するための必要物（生活必需品）の交易は「自然に適合した」ものである。少し飛躍して言えば、18世紀のスコットランドで、古典的なアリストテレス的起源をもつ「シヴィック的伝統」⁽²²⁾を継承しかつ根本的に修正したヒュームの影響下で、「自然的自由の体系」としての「商業社会」が自然に適合したものとして主張されるとき、アリストテレスからおよそ2千年後にアダム・スミスの革新が生まれるのである。

最後に、ポリス共同体は友愛や正義・公正のモラルによってのみ維持されうるし、また自由市民としての個人にとってもその共同体のなかでのみ自らの徳を実現できるのだから、アリストテレスにおける「政治学」と「倫理学」は相即の関係にあると言える。

2. 神のオイコノミア

キリスト教におけるエコノミー概念の拡がりの全幅を把握してここで論述することは、私の手に余る。私としては二つの問題にのみ議論を限定したい。一つは『新約聖書』におけるオイコノミアの用語の検討であり、次いで三位一体に関するテルトゥリアヌスの論述におけるオイコノミア概念の考察である。

G. キッテル・G. フリードリッヒ編『新約聖書神学辞典』第5巻を見ると、オイコノミアが「家を管理する職務」から由来して使徒としての「職務」（ドイツ語で Amt）を意味する例、また神の「救済計画 Heilsplan」を意味する例が挙がっている。後者は理解できるとしても、前者の「職務」の意味は不可解である。ギリシャ語に暗いわれわれが通常『新約聖書』の邦訳を読むとき、オイコノミアの用語がどのように使用され訳されているかは皆目わからないし、それは英訳でも仏訳でも同様である。ただし、ただ一つの邦訳を除いては。それは田川建三訳の『新約聖書』である。

擬似パウロ書簡の一つである「コロサイ」から田川訳で一節を引用しよう。「私は神の摂理に应じて、その教会の仕え手となったのです。その神の摂理は、あなた方に対して神の言葉を満たすために私に与えられたものである」（1 章25）⁽²³⁾。この引用中の「摂理」はオイコノミアの訳である。同じ箇所の新共同訳はそれを「務め」と訳しており、まったく異なる文になっている。田川氏はその邦訳で一貫してオイコノミアを摂理と訳しており、この箇所でも次のような訳注をつけている。「神のオイコノミア」とは「神がその『家』（つまり世界、宇宙の全体）を経営すること、この場合は『神の』を主格的属格と解することになる（神がなす摂理、神が持つ摂理）」（強調は筆者杉山）⁽²⁴⁾。ストア派のクリュシッポスはアルケーとしての自然による「宇宙全体のオイコノミア（統御）」について語った。「神のオイコノミア」とは神による世界の統御にほかならず、その統御が田川訳では摂理と訳されているのである。田川氏は、他の箇所（第一コリントス 9 章17）の訳注で、オイコノミアは「神による世界全体の秩序の管理という意味で『摂理』と訳される」と述べている。すなわち、田川訳の摂理という言葉には管理運営する、統御するという能動的な働きの意味がある。田川氏はまた、オイコノミアが「務め」（独訳では Amt、英訳では office、私の調べたところでは仏訳は charge）と誤解された理由についても言及しているが、ここではその詳細は省略する。

他の主なオイコノミアの用例は「時を満たすというオイコノミア」（エフェソス 1 章10）、「秘義のオイコノミア」（同じくエフェソス 3 章9）などである。オイコノモスについては、家の「執事」や市の「会計官」などのほか（ラローシュによれば、オイコノモスはさまざまな役人の職務を指示するために使われた）、「キリストの従者」である「神の秘義のオイコノモス」（第一コリントス 4 章1）という用例がある。田川氏はこれを「管財人」と訳し、「パウロはここでも自分こそは此の世で『神の秘義』を預かって管理する者、此の世における神の代行者だ、と思いつている」と注釈している⁽²⁵⁾。とはいえ、ここで神のオイコノミアにおける神の代理者としてのオイコノモスつまり司祭 minister という用例を確認することができる。

田川氏はオイコノミアを摂理と訳したが、もちろんそれは、この世を先見の明をもって支配するという意味での神の「摂理 *pronoia, providentia*」とは異なる。さらに訳語の上で錯綜するのだが、三位一体論では神のオイコノミアは通常神の「経綸」と訳される。古代キリスト教で三位一体 (*trinitas*, 三位性) が最初に体系的に論じられたのは、テルトゥリアヌスの『プラクセアス反論』(213年頃) においてである。これには土岐正策氏の優れた翻訳がある⁽²⁶⁾。三位性においてオイコノミアはいかなる意味で理解されていたのか。クリュシッポスが「宇宙全体のオイコノミア」について語るとき、その内在的原理としての自然はストア哲学的な汎神論的理解が可能である。しかし、キリスト教の三位性では神の超越性が問題になる。

土岐氏の邦訳では *oikonomia* は「経綸」、そのラテン語訳 *dispensatio* は「配剤」、*dispositio* は「秩序」と訳された。テルトゥリアヌスの三位性について大部の書を著わしたジョゼフ・モワンによれば、*oikonomia* と *dispositio* が同じ意味なのかどうか、従来から幾多の論争があった。モワンは両者の相違を明確にし、*oikonomia* の意味を確定している⁽²⁷⁾。*dispositio* とは、神の存在それ自体における永遠の秩序であり、それに対して *oikonomia* は、「三位性の歴史的な顕現」⁽²⁸⁾ である。それは受肉・受難・復活・救済などの歴史的活動を意味する「歴史的カテゴリー」である。したがって、「単一な神を、オイコノミアとともに」(テルトゥリアヌス) 理解しなければならず、オイコノミアは神の単一支配(モナルキア)を破壊しない。「神のオイコノミア」の概念によって超越的な神とオイコノミアとの結合が正当化される。*dispositio* と *oikonomia* の相違は、アガンベンが神学(テオロギア)とオイコノミアの二重性あるいは二極性として主張したものに対応し、それは後に王国(主権)と統治の二重性ともなる。

私は三位性について議論の詳細に立ち入るつもりはない。ここで確認すべきことが二つある。一つは、『新約聖書』で言及された神の「オイコノミア」と三位性におけるそれとは基本的には同じ意味をもつ。その基本的な意味は管理運営あるいは統治、すなわち統御であって、そのオイコノミア概念が三位性の問題編成に適用されているのである。第二に、神のオイコノミアにおける超越的で目的論的な契機の行く末はどうなるかということである。アガンベンの『王国と栄光』の主題もそこにあった。

3. 自然のエコノミー

今ここで18世紀においてなぜ自然の観念が再発見され、特権的な位置を占めるに至ったかを詳論することはできない。ルネサンスと宗教改革を経て、デカルト的な機械論とニュートン力学との影響下で、またストア哲学の再興のなかで、しかもキリスト教的な枠組をなお基盤としつつ、自然の観念がその世紀の文化を特徴づけることになる。その自然の観念は世俗化の契機でもあるが、法・理性・感情・幸福・社会性・自由・必然性・摂理・秩序・合目的性などの言葉と結びつき、科学、宗教、政治、道徳、医学、芸術などのあらゆる領域に浸透する⁽²⁹⁾。新たな自然科学と自然誌(博物学)の興隆はもちろんのこと、人間的な自然(人間本性)や人間的な身体と環境とに

関する新たな問題編成は、自然法や自然道徳の人間学的探究、その社会科学的な展開、および人間科学的な医学－生理学や公衆衛生など、都市計画・農業技術を含むさまざまな実践的学術研究への道を拓く。神のオイコノミアは、原初の啓示神学的な領域を離れて、地上の自然全体に移行し、人間と自然のさまざまなエコノミー領域に拡散するのである。

18世紀の「自然のエコノミー」概念について、ここでは自然誌家として盛名をはせたカール・リンネについてのみ触れておく。リンネには国家財政に関する実践知である重商主義的・カメラリズム的なエコノミー論があるが、ここでは触れない。リンネ（およびリンネ学派の一人）は、その1749年の論文「自然のエコノミー *Oeconomia naturae*」でこう定義している。「自然のエコノミーは、造物主の〈主権者〉によって設立された、〈自然的諸存在〉のきわめて賢明な配分秩序として理解され、その配分秩序に従って自然的諸存在は共通の諸目的に向かい、相互的な役割をもつ。」⁽³⁰⁾ ここではキリスト教の神は自明の前提とされ、鉱物的・植物的・動物的な三界をなす自然的諸存在は、それらの合目的な相互作用によって、すなわち繁殖・保存・消滅・地理的配分、そして規整原理としての個体群の比率によって、永遠の自己調節的な平衡を維持する。リンネの「自然のエコノミー」はまた「神のエコノミー」でもあり「神の英知」である⁽³¹⁾。リンネにはいまだ進化論の問題編成は存在しない。観想者としての人間は劇場としての自然のうちに永遠の神の技を読み取るのであり、リンネはそもそも「自然のエコノミー」の概念を、17世紀以降のイギリスにおける自然神学との知的交流から引き出していた⁽³²⁾。

また、国家における「正しい支配directionと管理運営」をポリスと呼ぶなら、自然界もまたポリスによって統御されていると言える⁽³³⁾。リンネは国家と自然の比喩的な同型性について語っているが、エコノミーの概念は領域横断的な機能を果たしている。

「自然のエコノミー」における自然とエコノミーとの関係は両義的である。すなわち、その関係が主格的であれば、アルケーとしての自然が（世界全体を）統御する（能動的自然）。その関係が目的格的であれば、自然を（神が）統御する（受動的自然）。その場合、自然は被統御系であり、統御されたその「秩序」を意味する。しかし、能動的か受動的かという解釈は当時も両義的なままであった。自然の「創造者」や神の摂理（神慮）について語りながら、同時に自然は能動的アルケーとして語られもするのである。

4. アニマル・エコノミー

リンネのナチュラル・エコノミーの概念が出現するほぼ1世紀前、「近代医学の模索」の時代に、医学の分野でアニマル・エコノミーの概念が科学史に登場していた。その概念は19世紀のクロード・ベルナールに至るまで、今日の生理学が対象にしているものを指示していた。リトレとロバンの『医学辞典』では *Economie animale* の項目で「動物と植物の有機構成を統御する法則の総体。最初にこの表現を用いたのはCharletonである……」と記述されている。アニマル・エコノミーとは、動植物の生体というミクロコスモスにおけるアニマ（生命原理としてのプシュケー）

による統御あるいはその統御系を意味する。その生理学的意味は生体の諸部分の平衡とその諸機能の統御にあり、目的論的な意味づけをもつ。植物エコノミー（植物生理学）の概念と区別されるに至ってはじめて、それはビュフォンでも明らかなように「動物エコノミー」という表現にふさわしいものとなる⁽³⁴⁾。

それではチャールトン（1619-1707）とは何者か。チャールトンはイギリスの王立協会に属した内科医であり、W. ペティの友人でもあった医師トマス・ウィリスと同時代人である。彼の生きた時代には、ガレノス以来の伝統がようやく破綻しつつあり、ハーヴィの血液循環論が根づき、デカルト的な機械論、ガッサンディやボイルの原子論（粒子説）が新たな自然観を確立しつつあった。また同時に新たな生氣論的な発想も生まれ、その傾向は18世紀に至ってシュタールのアニミズムやフランスのモンペリエその他での生氣論vitalismeの潮流となる。しかし実は、チャールトンが科学史上で名を残したのは、医学の分野においてではなく、『エピクロス・ガッサンディ・チャールトンの自然学』（1654年）という著作によって、彼がはじめてガッサンディの思想をイギリスに紹介したことによってである⁽³⁵⁾。その著作はその機械論と原子論によってボイルやニュートン、ロックといった同時代の人々に大きな影響を与えた。

私がチャールトンの名に出会ったのは、G. カングレム『生命科学の歴史』（法政大学出版局、2006年）を翻訳したときである。生命科学における「調節」概念の系譜学を企てるカングレムは、アニマル・エコノミーという広範な問題編成に出会う。チャールトンは1659年に同時に英語とラテン語で最初の医学関連の著作を発表する。『人間本性のエコノミーに関する解剖学のすべての新発見を含む、栄養・生命・有意運動についての自然誌』（英語）、および『アニマル・エコノミーの研究』（ラテン語）である。チャールトンはアニマル・エコノミーという用語の創案者とみなされてきたし、カングレムもそう考えている。

本論ではアニマル・エコノミーの概念のその後の展開を追究する紙面の余裕がなく、別稿に譲らざるをえない。『百科全書』における「エコノミー・アニマル」の項目とその執筆者、生氣論で著名なモンペリエ学派の医者バルテスの『人間科学の新原理』におけるアニマル・エコノミー概念、晩年のラヴォアジエによるアニマル・エコノミーの企てなど、18世紀にはアニマル・エコノミーの概念は一般的であったのだから私の知るかぎりでも論すべき対象は数多い。ここではチャールトンがアニマル・エコノミーの用語の発案者であるという一般に流布されている説についてだけ触れておく。エミリー・ブースは、チャールトンの医学関連の論文を精査した最近の研究で、その用語の創案はオランダ医学のデカルト学派、特に当時西欧の医学のメッカになりつつあったライデン大学における新医学に由来すると述べ、そのことを指摘した他の研究者の論文を注記している⁽³⁶⁾。したがって、もともと生氣論的な意味あいをもつアニマル・エコノミーの用語は、17世紀後半以降の機械論的・粒子説的な自然観の革新のなかで形成されたことになるが、その事態については今後もより詳細な研究が必要であろう。

5. モラル・エコノミー

モラル・エコノミーとは、その言葉の形式的な意味だけから言えば、モラルによる社会体の統御あるいはその統御系であると言える。モラルの意味は、習俗・慣習から倫理・道徳まで幅広く理解しうる。およそモラルによる統御なしにはいかなる社会といえども成立不可能である。その場合のモラルとは、一個人の宗教的あるいは内面的な規範ではなく、諸個人の相互関係、すなわち「社交性sociabilitas」における総体的な規範を意味する。周知のように、モラル・エコノミーの概念が注目されたのはトムソンの仕事によってである。トムソンは、18世紀における貧民の食糧暴動に焦点をしぼり、伝統的・慣習的な社会的規範による実践的統御としてのモラル・エコノミーの存在を明らかにして、ポリティカル・エコノミーとのその対立的性格を鮮明にした。トムソンのモラル・エコノミー概念を契機にして、また同時にスコットらによる東南アジアの農村反乱におけるモラル・エコノミー研究が加わり、我が国でも多くの論考が、民衆文化史、歴史社会学、農村研究などの分野で展開されることになる⁽³⁷⁾。

モラル・エコノミーの意味をどう把握するかについてはさまざまな意見があるが、近藤和彦氏も指摘しているように、「生存のための経済」とか「生存維持の経済」という理解は狭すぎるであろう。近藤氏はその語源から「習俗にもとづく世の中のなりたち・規範」という定義を提案している。また中澤信彦氏はモラル・エコノミーを、「民衆が、自らの慣習的な生活の維持のために、それに訴えることが正義であると慣習的に意識していた行為規範の総体」とまとめている。そのうえで中澤氏はeconomyの用語を十分表現しきれていないことを気にしているようであるが、私見によれば、モラル・エコノミーとは、そのような「行為規範の総体」そのものではなく、その「行為規範の総体」による社会体の統御または統御系である。

トムソンはその用語が18世紀に用いられていたわけではなく、1830年代にポリティカル・エコノミーに対置して使用されたと指摘している⁽³⁸⁾。しかし本論の冒頭で述べたように、1774年にケネーの業績を回顧したミラボー侯爵の弔辞のなかで，*économie morale*について言及されていた。ミラボー侯爵がその表現で何を言わんとしたかは判然としないが、私としてはモラルによる社会体の統治ほどの意味であろうと推測する。オンケン版『ケネー全集』に収められた1767年の論文「中国の専制政治」では、「中国の法律はすべてモラルの原理に基づいている。なぜなら…中国ではモラルとポリティックは一つの同じ学問を形成するからである」⁽³⁹⁾と評価され、そのモラルは自然法に基づくと述べられていることを付記しておこう。また最近邦訳されたニコラス・フィリップソン『アダム・スミスとその時代』でその著者が、スミスの『道徳感情論』は市民社会のモラル・エコノミーを論じたものであると規定していることは、考慮に値する⁽⁴⁰⁾。フィリップソンはモラル・エコノミーの概念をトムソンの限定から解放し、スミスにおいてモラル・エコノミーとポリティカル・エコノミーが相即の関係にあることを主張しているのである。

V. 結論にかえて

本論で取り上げたテーマは、アリストテレスのオイコノミアはもちろん自然のエコノミーやアニマル・エコノミーにしても、これまで知られてきたものである。私が特に明らかにしたかったことは、ラローシュが解明した古典ギリシャ語のオイコノミアや神のオイコノミアから、現代のリオータルやフーコーなどにおけるエコノミーに至るまで、その意味内容に変遷があるとしてもエコノミー概念にはある一貫した了解事項が内包されているということである。エコノミー概念は共同体の管理運営 administration や統治 gouvernement を基本的な意味としつつ、統御、統御の術（または学）、（被）統御系（つまりその秩序）という複合的な意味内容をもつ。したがって、リオタルのエコノミー・リビディナールは、リビドーによる統御あるいは統御系を意味し、フーコーの「権力のエコノミー」は権力テクノロジーによる統御あるいは統御系を意味する。エコノミーを形容する言葉はその内在的な原理を指示している。

エコノミーをどのように訳するとしても、その用語にはそうした基本的な意味とその複合的な用法が内包されている。たとえばニーチェは『悦ばしき知識』第1書の冒頭で「種属保存のエコノミー *Ökonomie der Arterhaltung*」について語っている。邦訳では通例に従いそのエコノミーを「経済」と訳しているが、その意味するところは種属保存の原理による統御またはその統御系であると解すれば、エコノミーというその用語はより精確に理解可能になるであろう。

本論ではポリティカル・エコノミーについて紙幅の関係で論じることができなかった。その用語あるいは概念の形成について論究した論文は数多いが、上述した私見に基づいて形式的に述べれば、ポリティカル・エコノミーの基本的な意味は、ある目的を実現するための政治体の統御（統治）、その統御の術（または学）、その被統御系すなわち「秩序」である。木崎喜代治氏は18世紀から19世紀へのポリティカル・エコノミー概念の展開を次のようにまとめている。それはまず「政治体の総体的秩序を維持するための統治」を意味していた。次いで、統治者の意志とは無関係に「人間の自由な行為から結果する自然的秩序」が存在することから、その対象は「政治体の統治からその秩序へと」転換する。さらに重点が「総体の秩序から富の再生産の秩序へと」移動する。木崎氏によればポリティカル・エコノミーとは「政治体の秩序（の学）」であるが、氏の力説するところはそれがつねに統治の契機を内包しているということである⁽⁴¹⁾。木崎氏によるポリティカル・エコノミーの諸規定は、エコノミー概念のもつ既述した複合的な用法と適合しており、少なくとも私のエコノミー概念理解は木崎氏の記述を許容しうる。

アダム・スミスの『国富論』第4編序論の冒頭で「政治家 statesman または立法者の学の一部門とみなされるポリティカル・エコノミー」について言及されているが、ポリティカル・エコノミーの用語はこの場合のような「政治経済学」の意味とは別に、「経済政策」（すなわち統御の術）の意味でも使われている。エコノミーの概念には統御の学あるいはその術の意味が含意されているがゆえに、そのような二様の用法が可能なのである。

18世紀にさまざまな領域でエコノミーの概念が歴史の表面に登場して、多様な学術的企図が生み出された。それらの学術的企図は、神の啓示神学的エコノミーから人間と自然のエコノミーに移行しつつ、人間主体による実践的な統御の術または学を新たに形成する歴史的転換を証言している。換言すれば、統御と被統御系は表裏の関係にあるから、エコノミー概念は新たな被統御系の存在（すなわち学術の対象）を標定し設立することになる。

注

- (1) 島津亮二・菱山 泉訳『ケネー全集』第1巻、有斐閣、1951年、39ページ。Quesnay, François, *Oeuvres économiques et philosophiques*, éd. par A.Oncken, 1888, p.9. また最近のケネー研究として次の書を挙げておく。Larrère, Catherine, *L'invention de l'économie au XVIII^e siècle*, PUF, 1992.
- (2) リオタール『リビドー経済』法政大学出版局、1997年。
- (3) Cf. Deleuze, Gilles, Guattari, Félix, *L'Anti-Oedipe*, Les Editions de Minuit, 1972.
- (4) Cf. Faye, Jean-Pierre, *Théorie du récit, introduction aux langages totaritaires*, Herman, 1972. 同じく *Langages totalitaires, critique de la raison narrative et de l'économie narrative*, Herman, 1972.
- (5) Foucault, Michel, *Dits et écrits*, tome 2, Gallimard, 1994, p.741 (『ミシェル・フーコー思考集成』第5巻、筑摩書房、2000年、356ページ)。
- (6) 「権力のエコノミー」概念のこの消滅は、フーコーにおける問題編成の転換を意味している。ところで、古典ギリシャの「オイコノミア」を論じる『快楽の活用』第3章の表題《économique》（「家庭管理術」と訳されている）について若干説明しておく。ここでのéconomiqueは、英訳版ではeconomicsと訳されている。周知のように、一般に学問領域を示す表記名には二つのやり方がある。一つはたとえばbiologyのように《-logy》を付するものであり、もう一つはethicsのように古典ギリシャの例にならって複数形で表示するものである。ところが、後者の表記法はフランス語ではなく、形容詞女性形の名詞化によって表記する（これまた古典ギリシャ語由来の表記法であって、女性名詞 technê または epistêmê に付された形容詞女性形の名詞化による）。19世紀後半にアルフレッド・マーシャルなどが「政治経済学 political economy」に代わって「経済学 economics」の用語を提案したが、後者はフランス語では女性名詞で l'économique と表記される。
- (7) ミシェル・フーコー『安全・領土・人口』筑摩書房、2007年、35ページ、訳注（4）。
- (8) 『ルソー全集』第5巻、白水社、63ページ。Rousseau, Jean-Jaques, *Oeuvres complètes*, tome III, Gallimard, p.241. Cf. Vargas, Yves, *Rousseau, Economie politique (1755)*, PUF, 1986. また, *Rousseau, Discours sur l'économie politique*, édition, introduction et commentaire sous la direction de Bruno Bernardi, J.Vrin, 2002.
- (9) したがってかつて中川久定氏がルソーのこの著作を「社会体制論」あるいは「政治体制論」と訳したのも理由がないわけではない（中川久定「ジャン＝ジャック・ルソーの基本的問題（中）」、『思想』岩波書店、1977年9月号、所収）。ただしもっと素直に訳せば「国家統治論」あるいは「政治統治論」であろうか。
- (10) E. Laroche, *Histoire de la racine Nem- en grec ancien*, Klincksieck, 1949. (名prénomはEとのみ記載されている)。
- (11) Deleuze, Gilles, *Différence et répétition*, PUF, 1972, p.54, note.
- (12) Cf. E. Laroche, op.cit., chap. VI. ラローシュによれば、ノモスの正確な語源は不分明であるが、そのもっとも基本的な意味は「秩序」であって、その点ではハイニマンの説明と一致している。ハイニマンによれば、ノモスは nemein の行為そのものではなく、その行為の結果を言い表わし、受動相の意味をもつ (F. ハイニマン『ノモスとピュシス』みすず書房、1983年、参照)。ラローシュによれば、その「秩序」の観念によってオイコノミアとノモスの両概念には重なるところがある。またノモス概念については次の書も参照せよ。Cf. Jacqueline de Romilly, *La loi dans la pensée grecque*, Les Belles Lettres, 2002.
- (13) E. Laroche, op.cit., pp.141-142.
- (14) ヴォルテール『哲学辞典』法政大学出版局、1988年、447ページ以下。Voltaire, *Oeuvres complètes*, tome 24.2, Elibron Classics, 2006, p.437 et suiv. 《Economie de paroles》は翻訳では「言葉の経済」と訳されている。

- (15) E. Laroche, *op.cit.*, pp.144-145.
- (16) Bréhier, Emille, *Chrysippe et l'ancien stoicisme*, PUF, 1951, p.34 et p.207, note. 付言すれば, A.スミス『道徳感情論』に, 《administration of the great system of the universe》というはなはだ類似した表現がある。神の技によるこの管理運営 administration はオイコノミアである。Smith, Adam, *The Theory of Moral Sentiments*, Liberty Fund (Glasgow Edition), 1982, p.237.
- (17) クリュシッポス『初期ストア派断片集』第3巻, 京都大学学術出版会, 2002年, 242ページ。Arnim, Hans von, *Stoicorum Veterum Fragmenta*, vol. II, K.G.Saur, 2004(1903), p.269.
- (18) Richiter, Gerhard, *Oikonomia*, Walter de Gruyter, 2005. Agamben, Giorgio, *Il regno e la Gloria*, Neri Pozza, 2007 (Bollati Boringhieri, 2009) [邦訳『王国と栄光』青土社, 2010年], Balan, Bernard, *L'Ordre et Temps*, J.Vrin, 1979. ビザンツ帝国における聖像破壊運動におけるイコン問題を論じた少し特殊なものとしては, Mondzain, Marie-José, *Image, Icône, Économie*, Seuil, 1996.
- (19) アリストテレス『政治学』, 第1巻第3章, 参照。
- (20) カール・ポランニー「アリストテレスによる経済の発見」, 『経済の文明史』筑摩書房, 2003年, 所収, 286ページおよび295ページ。
- (21) Vernant, Jean-Pierre, Vidal-Naquet, Pierre, *Travail et esclavage en Grèce ancienne*, Editions Complexe, 1988, p.72.
- (22) ここでの「シヴィック的伝統」は, ポーコックではなく, ジョン・ロバートソンが採用している用語である。ジョン・ロバートソン「シヴィック的伝統の極限にあるスコットランド啓蒙」, 『富と徳』未来社, 1990年, 所収, 参照。
- (23) 田川建三訳著『新約聖書 訳と註』第4巻, 作品社, 2009年, 55ページ。
- (24) 同書, 484ページ。
- (25) 田川建三訳著『新約聖書 訳と註』第3巻, 作品社, 2007年, 254ページ。
- (26) テルトゥリアヌス「プラクセアス反論」, 『キリスト教教父著作集13 テルトゥリアヌス1』教文館, 1987年, 所収。
- (27) Moingt, Joseph, *Théologie trinitaire de Tertullien*, Aubier, 1966-1969, vol.3, chap.5.
- (28) *Ibid.*, pp.918-931.
- (29) Cf. Ehrard, Jean, *L'idée de nature en France dans la première moitié du XVIII^e siècle*, Albin Michel, 1994 (Première édition, 1963), Conclusion.
- (30) Linné, *Économie de la nature*, in *L'équilibre de la nature*, J.Vrin, 1972, pp.57-58. また, この仏訳版論文集に付されたC.リモージュの「序論」を参照せよ。
- (31) Cf. *ibid.*, §1, note (a).
- (32) Cf. Koerner, Lisbet, *Linnaeus : Nature and Nation*, Harvard University Press, 1999, chap.4.
- (33) Cf. Linné, *La police de la nature*, in *L'équilibre de la nature*, J.Vrin, 1972.
- (34) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』の教えに従えば次のように言える。デカルトの有名な *esprits animaux* は通常これまで「動物精気」と訳されてきたが, それはガレノスのプネウマ・プシコンつまり *Spiritus animalis* に由来する。この *animalis* は *anima* の形容詞であるから, *anima* を通例に従って靈魂と訳せば, 「靈魂精気」と訳すべきである。なお, ガレノスの訳者である二宮睦男氏はそれを「精神プネウマ」と訳している(『ガレノス, 靈魂の解剖学』平河出版社, 1993年, 参照)。同様に, アニマル・エコノミーのアニマルという形容詞は「アニマの」という意味である。
- (35) ジョン・ヘンリー『一七世紀科学革命』岩波書店, 2005年, スティーヴン・シェイピン『科学革命とは何だったのか』白水社, 1998年, 参照。またガッサンディとの関係については次の論考を参照せよ。Cf. Rogers, G.A.J., *Charleton, Gassendi et la réception de l'atomisme épicurien en Angleterre*, in Murr, Sylvia (éd.), *Gassendi et l'europe*, J.Vrin, 1997.
- (36) Booth, Emily, *A Subtle and Mysterious Machine*, Springer, 2005, pp.82-83. この引用箇所原注(1)によれば, ホルターは1978年の論文で, ライデンの内科医C.Hogehlande (1590-1651) なるものをアニマル・エコノミーの用語の創案者として名指ししている。
- (37) Cf. Thompson, E.P., *Customs in Common*, The New Press, 1993. Scott, James C., *The Moral Economy of the Peasant*, Yale University, 1976. その他, 近藤和彦, 友部謙一, 池田寛二, 音無通宏, 中澤信彦など各氏の論文, 参照。

- (38) Thompson, E.P., *op.cit.*, pp.336-337.
- (39) Quesnay, François, *op.cit.*, p.605. またC. ラレールによれば、ケネーは、経済・モラル・政治に共通な領野である自然権の研究から出発して、社会の自然的秩序の総体的統治を解明した「自然権の理論家」である。Larrère, Catherine, *op.cit.*, pp.8-9, p.195 et suiv.
- (40) Phillipson, Nicholas, *Adam Smith*, Yale University Press, 2010, p.2, p.271. ニコラス・フィリップソン『アダム・スミスとその時代』白水社, 2014年, 15ページおよび360ページ。
- (41) 木崎喜代治『フランス政治経済学の生成』未来社, 1976年, 14-15ページ。もっとも統治を含む「総体の秩序」の契機を欠いた「富の再生産の秩序」の探究を、それだけでポリティカル・エコノミーと言えるかどうかは疑問である。

An Introduction to Genealogy on Concept of Economy

SUGIYAMA Yoshihiro

Abstract

The aim of this treatise is to throw light on the meaning of economy used from ancient times. For instance, what meaning has the economy of power that Michel Foucault insists on in his philosophy ? Therefore I try to retrace the genealogy on concept of economy. First of all, I attempt to inquire into, by means of the etymological study by E. Laroche, the concept of oikonomia used in ancient Greek literature. After this critical research, I treat the principal subjects of this genealogy, for example, oikonomia in the philosophy of Aristotle, oikonomia of Christian God, economy of nature, animal economy, moral economy etc. I come to the conclusion that the concept of economy has fundamentally the meaning of administration or government of community, and moreover the complex implications of control, art or science of control and order or system controlled.

Keywords: Economy, Administration, God and Nature, Genealogy

(すぎやま よしひろ 札幌学院大学人文学部教授 人間科学科)